

# 金沢

## かわら版

19

### 尾張町しごと通りで

えながら、加賀っぽの意地を持つ。肌で人生を過ごすというのか、自然とこだわりを持つ職人が多く住むようになっていた。

冠婚葬祭をはじめ、得意先の商家の物入り事には必ず参上して、そのつながりを深める一方、自分の仕事を磨く。文化八年(一八二二)の伊奈家の町松

格とは一味違う庶民の風情が、通り全体から感じられる。ここには、北陸特有の重苦しく晦暗い沈んだものはない。もっと前向きに、雨や雪の湿っぽさを自分のものとしている。

それこそ、ジメジメした水分会を水月のようにあしらうことで、相手を優しく思いやるウエットな付き合いがある。

「あんやと、ごきみっさん(お陰さん)！」  
挨拶(あいさつ)を交わしながら、かつては雨や雪を染しむゆとりがあったようだ。今流ならは「ウエルカムレイン」と言っているはずだ。

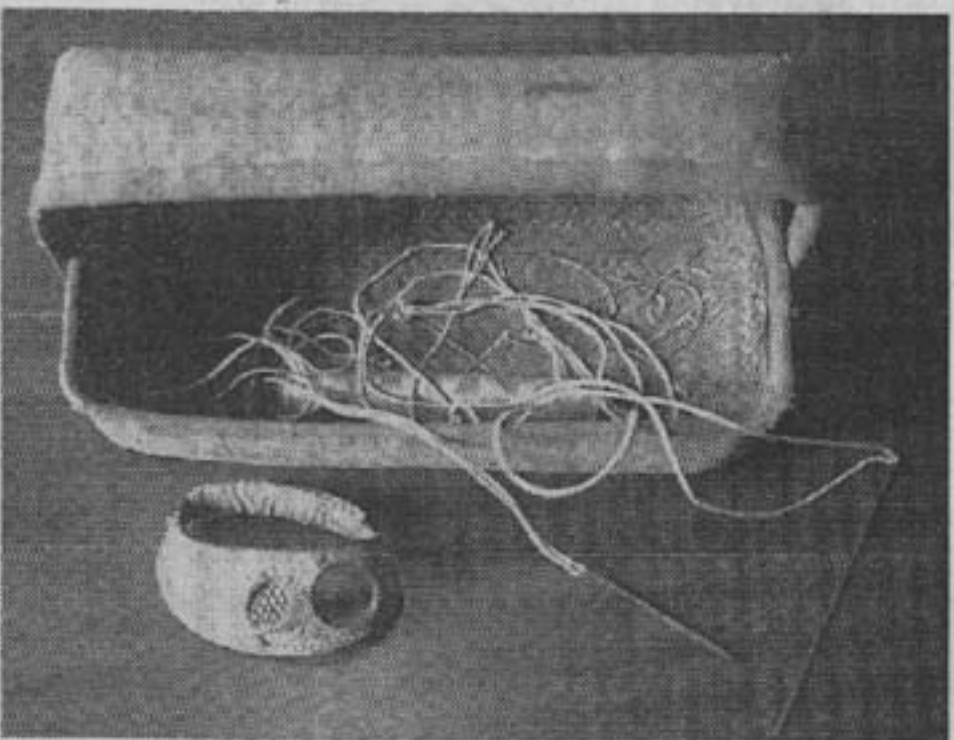
考えようによっては、情報過多の中で日々アクセクさせられない時代、ゆっくりと心を熟成出来たのかも知れない。文化の意味をたどると、ラテン語のCULTUSに行き着き、「心を耕作する」と説明されているのにもうなすけぬ。

加賀・金沢はお殿様から商人、庶民に至るまで文化を熟成していたのだから。ただ、その表現の仕方が、それぞれによって多少の違いはあっても。

商人町・尾張町の粋は、大店を維持していくために「手まめ足忠実(まめ)」。一家訓のように、全身全霊を使って実行しながらも、人前ではそんな苦労をおくびにも出さないことか。

図を見ると、狂言師あり、能楽師、義太夫補匠、生け花師匠、茶人、表具師、象眼師、袋物師、指物師あり。舟重(こっころ)商、質屋、舞職、桶(おけ)職、足袋職、魚屋、八百屋、医者……。

表造りの老舗(こせ)の風



#### 道具入れ

道具入れの丹念な手入れは職人の心構え。使い込まれた一

ついでが、黒光りする

#### 職人の粋

## 「手まめ足忠実」 全身全霊で実行